基督の處世訓

258
439

特18
44

基督の處世訓

目次

第一章 序論
一 基督の經世眼
二 猶太人の特長
三 木匠としての實驗
四 大家族の重任
五 ナザレ村の風俗
六 處世上の智識
第二章 人生……七—一六
一 人生の大目的
二 基督の眞意
三 一家團欒の樂
四 衣食以上の或物
五 家庭經營の方針
六 事業の撰擇

昭和
41 3 11
六頁
交換

第三章 財産……一七—二六
一三 貧弱者の味方
一四 財産上の大訓
一五 加翁富の福音
一六 監督伊氏の說
一七 人命は財産以上
一八 財産の使用法
第四章 勞働……二七—三六
一九 祖先傳來美風
二〇 基督の好模範
二一 勞働者と作業
二二 資本主と勞働者
二三 圓滿なる解決
二四 基督敎會の奮發
第五章 奉事……三七—四四
二五 奉事の大訓
二六 公德の淵源
二七 公德の養成所
二八 公德の本場
第六章 慈善……四五—五二

目次 終

二九 基督の慈善
三〇 慈善事業の勃興
三一 我國の慈善事業
三二 眞實の救濟
三三 宗敎家の冷淡
三四 眞誠の慈善家
三五 手の屆く範圍
三六 慈善家の資格
第七章 使命……五四—六一
三七 使命の眞意義
三八 使命と職業
三九 使命の自覺
第八章 應急……六二—六九
四〇 武士の注意
四一 應急の道
四二 人生行路難
四三 宗敎家の遭難
第九章 跋……六九—七五

基督の處世訓

宮川經輝著

第一章　序論

一　華族の貴公子又は世波の外に超然たる山僧にして處世の途を說んと欲せば誰か其迂愚を笑はざる者あらんや、世人基督が靈界の巨人にして萬古に冠絶する所の大眞理を闡明せられたるを知れ共彼が處世の途に於て備さに辛酸を嘗め、天晴なる實歷を有することを看過する者多し、吾人は彼が經世眼の高妙卓絕なるに推服するや久し矣、世若し處世上に於ける基督の大訓を遂行せば其が國家社會に及

猶太人の特長

ぼす恩澤の極めて洪大なるや吾人が疑を容れざる所なり。

二　吾人々類は各其種族に依て特長を異にす、古の希臘人は哲學文藝に長じ、羅馬人は政事法律を以て鳴り、猶太人は宗教文學に於て前二國民を壓せしと云ふ、吾人を以て之を觀れば猶太人には今一つの特長あり商才卽ち是れなり。

ソロモン王の盛時に於ては西は地中海の商權を握りたるツロとシドン兩港の商賈と通商を開き、東は遠く希臘、印度等より盛に商品を輸入し、而して王室の富は宇内に冠たりしとぞ、爾來數千載イスラエル王國には幾たびか大變遷ありしも猶太人民は球上至る處に商才を發揮し今日に於ては殆んど世界の富を左右せんばかりの勢を有せり、吾人は獨りイエスの血液にのみ人種的商才の混入するものなかりしとは信ずる能はざるなり、從來基督信徒はイエスを尊崇するの餘り、其神子たるを誇張し、彼が人の子たりしことを忘れたりしを以て此種の問題を研究する者なく、偶之あるときは異端なり邪說なりとして排斥され、甚しきは破門の嚴罰に處せらるゝを以て敢て論究する者なかりしは是非もなき次第なりき、請ふ吾人をして忌憚なく所思を語らしめよ。

木匠としての實驗

三　夫れイエスは正しく木匠ヨセフの子にして父の死後其家を繼續されたるとは福音書の示す所にして何人も異論なき所なり、輓近聖書學者の研究によればヨセフは普通の大工にあらずして棟梁なりしと云ふ、果して然らば其名跡を繼承したりしイエスの智惠と常識を以てして叩き大工の位置に甘んずべきにあらざれば彼も亦棟梁なりしと推測するも決して失當にはあらざるべし、又イエスの比喩を見

大家族の重任

るに建築上の實驗に出でたるもの少からず、而して其實驗は即ち棟梁としてのそれにあらずや、路一四の二七以下は築城の豫算問題にして太七の二四以下は定礎問題なりとす、是れ吾人がイエスを以て棟梁なりしと云ふ所以也。

四　思ふにイエスは幼にして父ヨセフに別れしならん、而して家にはヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの四弟と二三の妹ありしとの說眞なりとせば之が養育の責に任じたる寡婦マリヤの苦心は奈何ばかりなりしや想察するに餘りあり、長男イエスは齡尙幼なりと雖既に十二を過ぎ豈に茲母の苦心を坐視すべけんや、必ずや亡父の業を繼承して夙に起夜に寢ぬ孜々として家業に勵精し、以て母の心を慰めしならん、少くも十七八年間は木匠の業務に從事し、大家族經營の任務に當りしや必然なり。

ナザレ村の風俗

五　尙一つ考ふべき事は基督が奈何なる人物を對手として建築業をなされしやにあり、聞所によれば彼が住居地たりしガリラヤのナザレは「ロマ」街道に近き山間の小都府にして住民の多くは旅客相手の商業を營みしと云へばかゝる小商人の常として詐僞奸譎を事とし全村擧つて墮落し居りしことは溫行の譽高かりしナタエルが「ナザレより何の善者出んや」(約一の四六)と公言して憚らざるに徵しても明かなりとす、基督はかくの如き奸惡なる人民の間に立つて業務を營まれたりとすればよく人情の秘密に通曉し惡黨操縱の術にも長じたりしや言ふを待たざるなり、吾人福音書を繙き當時の學者パリサイの徒が基督に向つて難問を試るを見るに其答辭なり論證なり一々肯綮に當りいかなる難問者も二の矢を繼ぐ能はずして退かざるを得ざりしは是れ全く其肺肝を看破せられたるに因らずんばあらず。

六　處世上の智識

斯の如く一方には奸譎なる村民の間に立ち狡猾なる手段を弄する大工石工の上に立て作業をなし、他方には八九人の大家族を双肩に荷ふて立たれしイエス基督は處世の途に於ても天下萬世に教訓を與ふべき實驗的智識を有せられしや明かなり、今や富者はいよ〳〵富み、貧者はいよ〳〵貧境に陷り、資本主と勞働者の懸隔は日に益甚しく兩者の間には殆んど渉るべからざる一巨淵を生じ、其他慈善事業なり社會事業なり吾人が速に解決すべき大問題は漸〳〵多きを加へつゝあり、此時に際して基督が是等の諸問題に關して如何なる教訓と暗示を與へしかを研究するは最も時宜に適するものなるを思ひ、聊か研究體得する所を述べて斯道に志ある人々の參考に供するは無益の業にあらざるべきを信ず、是余が本書を著す所以なり。

第二章　人生

是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飲まん身體の爲に何を衣んと憂ふこと勿れ生命は糧より優れ身體は衣よりも優れる者ならずや空の鳥を見よ蒔こともなく穫ることもなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり爾曹之よりも大に勝るる者ならずや平爾曹のうち誰か能おもひ煩ひて其生命を寸陰も延得んやまた何故に衣のことを思わづらふや野の百合花は如何して長かを思へ勞ず紡がざる也われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき稗は今日野に在て明日爐に投入らるる草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや嗚呼信仰うすき者よ然ば何を食ひ何を飲まんとて思わづらふ勿れ此みな異邦人の求る者なり爾曹の天の父は凡て此等のものゝ必需ことを知たまへり爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等

人生の大目的

のものは皆なんぢらに加らるべし。(太六の二五至三三)

七　人あり草木鳥獸は何の爲に生存するやと問い直に明答を與へ得べきも、人間存在の目的を問ふ者あらば吾人は何を以て之に答へんとする乎、是れ一見閑問題なるが如くなるも決して然らざるなり、試に思へ茲に到着點を定ずして歩を運ぶ者あらば其發足當時に於ては歩するが爲に千歩萬歩苦もなく運び得るも暫にして大疲勞を來すや知るべき也、之に反して到着點を目指す者は一歩は一歩より之に近接しゆくの愉快を覺ゆるを以て假令道中千仞の谷に下り又羊腸たる峻阪を攀ぢ登るが如き行路難に遭逢するも毫も倦怠の色なく進行を繼續するを得るにあらずや、人生亦此の如し、吾人は何の爲に此世に生れ又何の爲に此世に存するかを知らざれば恰も衣食せんが爲に衣食するの類にして山海の珍味は常に食卓に上り、夏は輕羅を纒ひ冬は狐狛を着するも其生涯や無意義沒趣味たるを免れず、是れ吾人が堪ゆべき所にあらざるなり。

衣食以上の或物

八　看よや顏回は一簞の食、一瓢の飲、常に茅屋の中に棲息し肱を曲て枕となすの貧境に甘じ、吾人が人生の快樂として數ふべきものは一として之を有せざりしに拘らず、孔夫子をして「回や其樂を改めず賢なる哉回」と賞贊の辭を發せしめたる所以のものは是衣食以上の或ものを意味するにあらずや、かの希臘の哲學者ダイオゼニスの如き又我西行の如きいづれも清貧に安じ天命を樂みたる偉人なりき。基督曰はずや「我なんぢらに告ん生命の爲に何を衣んと憂慮て勿れ生命は糧より優り身體は衣よりも優れる者ならずや」(太六の二五)と、是れ吾人は生る爲に衣食するものにして衣食せんが爲に生るものにあらざることを敎ゆるものにあらず

基督の眞意

や、彼又曰はずや、先づ神の國と其義とを求めよ然らば之等のもの(必要品)は皆なんぢらに加らるべし」(太六の三三)と、思ふに「神の國と其義」とは吾人々類が先決問題として求むべきものなれば、天意人道の存する所に從ひ人らしき人格を養ひ、而して其養ひ得たる人格を以て宜しく天意人道を發揮せんが爲に大に盡瘁すべしと云ふ意に解すべきにあらずや、果して然らば吾人が世に生存する大目的は先づ人格の修養に志し、百練千鍛以て俯仰天地に恥ざる士君子たるの資質を具備するに存するや明かなり、人苟くもかくの如き高貴なる志望を有して立つときは衣食住の如き必需のものは日夜心膽を勞せざるも之が供給を得る決して難からざるなり。

九　吾人は決して衆人皆貧境に安せよと言にあらず、成し得べくんば社會の凡ての階級をして衣服飲食の末に拘々たらずして、人生の大目的に向つて勇往直進せんことを希望して止まざるなり、基督の眞意も亦之に外ならざるべし、されば之を彼常に貧人の間に伍して靈的幸福を與へんが爲に奔走努力せられたるなれ、決して他意あり て然りしにあらざる也、世人多くは衣食住の三者を第一位に置き人生の大目的を度外視するの傾向あり、是れ基督が本文の如く喝破せられたる所以也。

家庭經營の方針

一〇　吾人進んで家庭を經營せんとするや、先考ふべき問題は人生の大目的たる人格修養也とす、世人妻を撰ぶに其容貌の美醜血統の善惡を詮索するに急にして、配偶者がいかなる理想を保ち、いかなる趣味を有し且其學問性格は己が人格を發揮する上に、幾何の寄與をなすべきかを考へず、又女子が夫を定むるに際し財産の有無、門地の高低を見るに腐心し、我がより善き半身となるべきもの、志操

性格等を究めざるもの多きは吾人が痛嘆措く能はざる所なり、殊に我邦において離婚者の續出するは一般習慣の然らしむる所なりとは云へ結婚後同棲の日に至り理想、趣味、性格相容れざるよりして終に人生最も厭ふべき破鏡の悲劇を見るに至る者多し、之が矯正策を講ずる是れ吾人の任務にあらずや。

一家團欒の樂

一　若し夫志望を同うし信仰を同うする男女相結んで茲に良室家を作りなば衣服、飲食、住家等に至ては一も見べきものなく、否不自由勝なる生活なりとするも所謂夫唱ふれば婦之に和し、異身同體の實を全うするを以て浮世の波浪はものゝかはてふ勇氣を生じ、且つ磨き且修ひる間にはよし富有とは稱すべからざるも生計難には苦しまざるまでに至るべし、此間における夫妻間の歡樂に至ては吾人は形容すべき詞を知らず、詩人歌ぶて云く

はにふの宿の　お芝恒の
一重の中は　樂しき國
うき世の外の　ゆめ安けく
春風かよへる　オレヤの山
あしたに妻は　花とゑまひ
夕にちごは　鳥とうたひ
老をしへの　鏡として
心はゆたけき　ユダヤの野邊
樂しき國は　遠くあらじ
やねより月は　もれいるとも
そとぼそを雨は　うるはすとも
我家はみかみの　エルサレムよ。

新撰讃美歌三八五

事業の損害

一二　倘吾人が一事業を成んとするに際して先講究すべきは其事業が己が人格を毀損せざるは勿論、之に關係する所の人々の性格に危害を及ぼすが如き事なきやにあり、既設の事業に加盟せんとすると

きも亦然り、苟くも己を毀け人を害するが如き事業は斷然之を忌避するのみならず、己が勢力の許す範圍においては之が根本的排斥を敢てせざるべからず、是吾人が有する社會奉公の義務にあらずや。幸に天意人道を補益する業務に從事するを得ば假令利する所多からざるも衷心言ふべからざるの滿足と快感を有するを以て其の人格は日に月に向上發展し、社會が之に對する信用も亦層一層進み來るべければ優に豫期以上の成功を收め以て德澤を社會に漲らすに至るべし。我二宮尊德の如き即ち是れなり、英米獨に於ては此種の成功者少からず、吾人豈に勤めざるべけんや。

看よ今日我邦に於て金樓玉殿の中に住し、贅澤三昧に可惜光陰を空過せる貴族富豪の徒にして人生の眞意義を悟り其の衷情安心と滿足を有する者果して幾人かある、彼等の多くは業に已に此世の佚樂に飽き、其事業の如きも自家の損失とならずして之を他人に讓與するを得ば一日も速に去つて安樂の地に就かんと欲すれ共、如何せん讓與は多大の損失を意味するを以て止むを得ずして依然之が進行を計る者尠からず、かくの如き儕輩に於ては事業即ち苦痛にあらずや、彼等は一時の快樂を得んと欲して勝地を探るあり、別莊を建設するあり、又骨董繪畫を弄するあり、甚しきに至りては酒池肉林の豪遊を擅にし、花を弄し妓に戲れ、害毒を社會に流す者あり、彼等にして一たび人生存在の大目的を悟るを得ば其豪遊娛樂の爲に擲つ所の財力を擧て慈善教育又は社會事業の爲に貢献するに至らん、去れば從來不義の爲に費やされし金錢が人類の向上發展の爲に用ゐらるゝのみならず、一朝前非を悟りて改悛したりし富豪者の幸福滿足は果して奈何ぞや、蓋し人は其生存の目的に復歸せざれば眞正の安心快

惑は得て期すべからざるなり。

第三章　財産

蠹くひ銹くさり盜うかちて竊む所の地に財を蓄ふるを勿れ蠹くひ銹くさり盜穿て竊ざる所の天に財を蓄ふべし蠹なんぢらの財の在ところに心も亦ある可れば也。(太六の一九至二一)

人は二人の主に事ることを能ず蓋これを惡みれを愛み此を親み彼を疎べければ也なんぢら神と財に事ることを能はず。(太六の二四)

凡そ己の爲に財を積へ脾に就て富ざる者は此の如なり。(路一二の二一)

貧窮者の味方

一三　基督處女說教の題詞は之を褒六一の一に取り世の貧者心の傷る者、壓制下に呻吟する者に對しては最も深厚なる同情を有し、其三年の公生涯は此種の階級の爲に捧げられたりと云も不可なき程なり、古來貧者の味方又は同情者を以て自任する者多くは我大盛

中齋又は社會黨の一派の如く一國の主權者又は富者に反抗敵對するを常とす、然れ共基督は世界萬衆の大師父にして其仁天の如く、其義萬古を貫くもの、いかに貧者の友なればとて豈に輕舉富者に反抗するが如き事あらんや、強いて富者反抗の傾向とおぼしきものを求れば貧者の美德に關する比喩又教話は多けれ共富者を德としたりしものなき是れなり、是れとても平靜なる心を以て見るときは事實を有の儘に示されたるのみにして故意に富者を排斥せんとして然かく言明せられたるにあらざるや明かなり。

由來猶太人は蓄財に巧みなる者、利益問題に關しては沒道德の行動を敢てし、骨肉互に相爭ふ者も少からざりし事は路一二の一三以下同一五の一一以下を見ても知るべきなり、セーキスピヤの戲曲ベニスの商人の段を讀むものにしてシャイロクの殘忍刻薄なる要求も其原因は貸金問題なるに想到せば利益問題に於ての猶太人は到底常識を以て律すべからざるものあるを認ずんばあらず。

財産上の大關

一四　夫猶太人は斯の如き性癖を有せしを以て基督は財産問題に對しては「蓋くひ銹くさり盜うがちて竊む所の地に財を蓄ふると勿れ」との嚴命を下し、更に其精神を說明して「蓋なんぢらの財の在ところには心も亦あるべければ也」と示されたり、思ふに金錢以上に理想、趣味、又は高尙なる使命の存することを覺知する者に於ては假令巨萬の富を有するも決して心を煩すに足らざれ共、下根の人殊に猶太人に取ては金錢問題は殆んど最上の問題なるが如き觀ありしを以て天上に財を蓄ふべきことを奬勵されしや明かなり。

由來宗敎家なるものは萬事消極的態度を取るの傾向ありしを以て蓄財問題に關しても同一の筆法に出で貧境にあらざれば圓滿なる祝福

は受け難きものゝ如く附會し大に清貧を唱道する所ありしも、家族を有する一般人民にありては到底甘受すべくもあらざりしかば、責ては僧侶のみにても禁蓄財の主旨を遵守せしめんと欲し僧徒の三德中に「貧乏」を加ふるとなりたり、吾人が深く遺憾とする所は富に對する宗教家の思想が上述の如く消極的なりしを以て俗衆に於ても富を得るは一種の罪惡なるが如く思惟し會堂、寺院等建立の爲の寄附金は「罪ほろぼし」てゝ芽出度からざる名稱を附するに至れる事なり、嗚呼愚も亦甚しからずや。

「爾曹神と財に兼事ふる能はず」との聖語の如きも從來は禁蓄財の意に解せられしも、近頃に至りて基督の眞意は消極的に解すべからず即ち積極的に解釋すべきものなり、吾人は神と財に兼事する能はざるは是れ猶ほ貞女兩夫に見ゆべからざるが如し、然れ共神に事ふるの

心を以て財を使用するは是れ二十世紀の新福音にあらずや、昔は金錢の奴隷となり之に事へたるもの多かりしも今は然らず、巨萬の富を有する者にして燃るばかりの熱誠を以て神に事へ、其が儲得たる金錢は毫も惜む所なく、天意人道の爲に喜捨する者續々輩出するに至れり、蓋悅ぶべきの現象なり。

一五　カルヂギー曾て論じて曰く財力は猶水力の如し十噸又は百噸の水は其効用極めて小也、百川相集つて江河の流をなす時は以て大船を行べし、萬噸の水直下する時は以て電力を興すべし、金錢も此に十金彼に百金其利する所極めて微也、然れ共集つて百萬、五百萬、一千萬に至れば如何なる大事業をも企つべきなり、財力宜しく集中すべし、千萬の財力を蒐集する人は決して凡庸の人にあらず、必ずや有爲の人たらずんばあらず、彼は其生存中に有効的に其集めたる財

力を分配するの義務ありと、翁は此言の如く齢六十七歳に及んで其餘命幾くもなきを悟り、爾來十名の委員と三名の專任書記に世上補助すべき事業の調査を依囑し、其提案によりて盛に富の分配をなしつゝあり、實にかくの如き壯擧は範を世の富豪に示すものにして其恩澤は獨り現代に止まらず遠く百世の後に及ぶべし、翁の如きは富に主たるものと謂ふべきなり。

一六　ロンドンの監督インニンガム、インングラム數月前米國に航し、叫んで曰く諸君知ずや財は天下共通の者にして一人の私すべきにあらざるを、余は三百年前の建立に成る監督官舍に住居するものなるが、余もし此の舍宅及び凡ての什器は我有なりと言ひ、余が年俸拾萬金も亦我有なりとして私の爲めに使用しなば、諸君は余を目して狂者と稱するか然らざれば貪婪飽なきの吝嗇家と嘲るならん、諸君

が有する所の富も亦然り、是れ天下共通の實にして諸君の私すべきものにあらず、富の主は神にして諸君は其手代にあらずや、宜しく手代の心得を以て神の富を處理すべきなりと、インングラムの此叫は米國の富豪社會に一大感動を與へたりと云ふ、吾人は是れが一時の感動に止まらずして財産處理の原則とならんことを切望して止まざるなり。

一七　基督が「我が兄弟に遺業を我に分よと命たまへ」（路一二の一三以下）と懇請したりし人に向て「戒心して貪心を愼よ夫人の生命は所蓄の饒なるには因ざる也」と答へ、更に進んで「或富る人その田畑よく豊ければ自ら忖いひけるは我作物を藏る所なきを如何せん又曰けるは我かく爲ん我倉を毀ち更に大なるを建すべて我作物と貨を其所に藏べし斯て靈魂に對ひ靈魂よ多年を過はどの許多の貨物を有たれば安心

財産の使用法

して食飲楽めよと言んとす然神これに曰けるは無知なる者よ今夜なんぢが霊魂とられんとす然ば爾の備し物は誰が有になる乎」との意味深長なる比喩を以て、人の生命は財産以上に存すべきものなるを示し、其結尾に於て「凡そ己の爲に財を蓄へ神に就て富ざる者は此の如きなり」と喝破せられたり。

一八　之に由て是を觀ば吾人は前章に述たる如く人生の目的たる人格修養に志し、此高尚なる見地より財産の何物たるやを觀じ、自他終極の目的を達せんが爲には財産を奴隷の如く使用し、いかに財力を集中するに急なればとて天意人道に背馳するが如き行動あるべからず、吾人は信徒諸子が巨萬の富を成さんことを望む、然れ共富の爲に神を忘るゝ者とならんよりは寧ろ貧境に在るも神の人として向上せんことを望む、箴三〇の七以下に云く「我二の事を汝に求たり、わが死ざる先に之をたまへ、即ち虚偽と誑言とを我より離れしめ、我をして貧からしめずまた富しめず、たゞなくてならぬ糧をあたへ給へ、そは我飽て神を知ずと云ひエホバは誰なりやといはんことを恐れ、また貧くして竊盗をなし我が神の名を汚さんことを恐ればなり」と、

パウロは生來のロマ人なりと自ら誇稱せしを見ば曾に名門と云ふのみにあらず、富有の家庭に育ちし者なるべきを信ず、彼が一朝豹變基督の使徒となりて後は天幕裁縫業によりて自家と其同勞者の糊口を凌ぎたりとの事なれば、極めて質素なる生活をなせしならん、かくの如くして貧富兩ながら實驗したる彼は教へて曰く「われ乏に因て之を言ふにあらず蓋何なる狀に居るもそれを以て足りとする事を學べばなりわれ貧賤に居の道を知又富厚に居の道を知飽ことも飢ることも豊ことも歉ことも諸の事に於て之を熟練せり」(腓四の一一、一二

こと、實にパウロの如きは其精魂を傾注すべき大問題を捕捉したるを以て衣食住の如きは問題と成ざりしならん、吾人も亦此の如く人生の大問題を捕捉するの人となり、幸にして巨萬の富を得れば富厚に處するの途を講じ、不幸にして洗ふが如き貧境に居るも之が爲に我志望を毀るとなく、超然として我人格を磨き、生れ甲斐ある生涯を送りたきものなり、富貴不淫貧賤樂男兒到此是剛雄とは此妙境に到達したる人を謂乎。

第四章　勞働

それ天國は朝はやく出て葡萄園に工人を雇ふ主人の如し工人には一日に銀一枚を予んさ約束をなし彼等を葡萄園に遣せりまた九時ごろ出て街に徒に立る者を見て用事も葡萄園にゆけ相當の價を予んと彼等に曰ければ則ち往りまた十二時と三時ごろ出て前の如く行り五時ごろ出て又ほかの立る者に遇て曰けるは何ゆゑに終日ここに徒く立や之に答て曰けるは我儕を雇ふ者なきに因てなり彼等に曰けるは用事も葡萄園にゆけ相當の價を得べし日暮るとき葡萄園の主人その家宰に曰けるは勞力たる者等を呼て後に雇へる者を始さし先の者にまで價を給へよ五時ごろに雇はれし者ども來りて銀一枚づつを受たり先の者ども來りて我儕は多く受るならんと想ひしに亦銀一枚づつを受これを受て主人と怨つぶやきけるはこの後至者の勞力たるは一時ばかりなるに終日くろしみを任あつさに當る我

傳と均しく之をなせり主人その一人に答て曰けるは友よ我なんぢらに不義をせず用は銀一枚の約束をなしたるに非ずや用のものを取て往われ亦この後至者にも用の如く予ふべし我物を以て我おもふ如く行は宜らず乎わが善に因て用の目あしき乎此の如く後の者は先に先の者は後になるべし夫よばるゝ者は多しと雖も選るゝ者は少なし（太二〇の一至一六）

祖先傳來美風

一九　勞働の神聖は古來猶太國民が認識したる所にして、十二祖先の父ヤコブは牧畜に依て身を起し、彼等が最も尊崇する所のダビデ王も其青年時代に在ては「ベツレヘム」の野に羊を飼ひ、預言者「モスはテコアに桑樹を栽培したりし也、基督の降世以前に於ては、いかなる鴻儒碩學も必ず何か一の職業に習熟するの慣例となり、ラビヨハナンは靴工、ラビイザクは鐵工、ラビシャマイは左官なりしと云ふ、語に曰く手に職業を有する人は猶ほ垣を廻らせる葡萄園の如く誘惑と危險を免れ得べし」と思ふに猶太人が其副業として一種の職業を習熟するに至りしは祖先傳來の美風なりとは云へ、必ず深き理由なかるべからず、夫れ人の弱點は或は權門に媚び或は富豪に諛り、己が主義所信を一貫する能はざるにありて存す、宗教家は勿論智者學者に至るまで一朝事志と違ひ其目的を達する能はざるが如き事變に際會するときは退いて其習熟せる職業によりて口を糊し得べきを以て斷々乎として其主義所信を發表貫徹するを得べきなり、孟子の所謂恒產ある者は恒心ありとは夫れ是れを謂ふ乎。

基督の好模範

二〇　基督イエスが十七八年の間木匠の業に從事されたる一事は動もすれば飽食煖衣を冀ひ、隨て勞役を厭ふ人類の爲には千載不朽の好模範にして、かの歐米諸國の士民が勞働を神聖也とする美風は其淵源遠く是にありと謂ふ誰か然らずとする者あらんや、世基督の公

生涯中彼がベルモン山頭白雪場裏に於て天父と接觸し靈光四邊に輝けるを見、又十字架上の神々しき死狀を見て渴仰憧憬するを知る、然れ共身に木匠の仕事服を纏ひ、手に斧鑿を取りつゝ人の子として の人格を磨き、救世濟民の經綸を夢みし基督の公生涯のいかに靈妙なるかを認めざる者多し、是れ猶ほ千軍萬馬を叱咤せる大將西鄕隆盛に謳歌して鹿兒島の近村に田園生活に餘念なき南洲翁を知らざるが如し、公私の二方面より學ぶにあらざれば偉人の眞相は得て期すべからざる也、上述の如く親しく勞役に從事して其神聖なるを看取すると共に其苦痛をも實驗したりし基督は勞働問題に就て容喙すべき權利あり、否な吾人が傾聽に價する敎訓を與へ得べきを信せんと欲す。

勞働者と作業

二、現時歐米に於ては人の恩惠によりて衣食せんと欲するが如き

不良民は漸く其の數を減じ、いかなる勞働をも敢するを辭せず、只爲べきの業務なくして飢餓に瀕する者少しとせず、社會問題に於て最も重要なる一事は勞働者に作業を與ふるにあり、現に桑港問題と云ひ、晩香事件と云ひ、其原因は白人勞働者が東洋人に其作業を奪はるゝの杞憂に發せし者也、本文の比喩を見るに先工人の賃銀を銀一枚と定め之に作業を予へ、而して九時、十二時、三時、五時と二時又は三時間を隔てゝ人を街道に派し徒く立る者即ち作業なくして苦める者を勸誘し、悉く葡萄園に收容したりとあり、いかにすれば凡ての勞働者に作業を供給し得べき乎、是れ政事家及び社會主義者が均しく苦慮講究する所なれ共未だ解決を見るに至らず、本比喩中の葡萄園の主人が僅か一時間勞役せし者にも一日の賃銀即ち銀一枚を供給せしを見れば、彼は慈善心に富める大資本主なりしや知るべきなり、

如上の問題も資本主の多數が貪婪飽くなき虎狼の心を以て事業を經營する間は到底滿足なる解決を見る能はざるべし、要は資本主をして人生の大目的を解せしめ、而して其蒐め得たる資本を以て普く勞働者に作業を予ふるの壯擧に出しめんでとなり。

資本主と勞働者

二二　近時資本主と勞働者とは互に其利害を異にする者の如く相感し、資本主は資本主の同盟を結び、勞働者は勞働者の連衡を企て、二者互に相容ざるが如き觀あり、是實に思はざるの甚しきもの也、試に思へ何種の工場にしても一たび同盟罷工の起るあれば損益相半するは其上乘なるものにして多くは不測の弊害を釀すものなるは何人も首肯する所なり、然れ共互に相衝突する場合に於ては騎虎の勢如何ともし難きものあり、是に於て乎仲裁審判に一任するの說漸く二者の間に容れらるゝに至る傾向ありと云ふ、是れ其罷工に勝るや

勿論なりと雖未だ滿足なる解決にはあらざるなり。

圓滿なる解決

二三　吾人は英、米、獨の工場中極めて少數なりとは云へ資本主が勤めて勞働者の幸福、安慰、向上を計り、換言すれば親心を以て勞働者の爲に盡し勞働者も亦子心を以て資本主の爲に勵精する者あるを見て萬綠叢中紅一點の感なくんばあらず、是れ本文比喩の精神にして勞働問題も此妙境に到入せざれば圓滿なる解決を見る能はざるなり。從來基督敎會は社會問題に對しては甚だ冷淡にして偶同盟罷工の頻發するあるも是れ猶ほ惡鬼の所爲なるが如く看過し、敢て之が解決を試みんともせざりき、蓋し英米の諸敎會に於ては之が會員たる社會中流以上の人士にして勞働者の如きは殆んど齒せられざる情態なりしを以て、後者の敎會に對する態度は恰も秦人の越人に於けるが如く極め疎遠にてありたり、前者も亦勞働者に對しては恰も

對岸の火災を視るが如くなりしは止を得ざる次第なりき、然れ共如上は基督の聖旨を奉ずる者に有間敷事にして忌はしき情態なるや論を待たず、二十世紀の進歩したる教會は基督に復歸せざれば止まざる方針なるを以て基督が勞働者に對せられたる寛容謙遜の態度に倣ひ、社會問題の解決は一に教會若くば其指導者の努力に待たざるべからずとの叫聲は日一日と高まり來り、曩日ブース大將の社會事業に冷淡なりし教會も今日となりては其事業に贊同するは勿論、彼の至る處非常の熱誠を以て歡迎せらるゝに至りしなり、昨年の春北米フークランドの牧師ブラオン博士がエール大學の神學生の爲に講壇の社會的使命と題して出埃及記中なるモーセのイスラエル民族救濟の事歴を引用して、教會の牧師及び指導者が本問題を等閑に附すべからざる理由を詳述するや大に教界の注意を喚起し、アウトルック雜誌を初め其他の宗教雜誌に於ても之に對して贊同の聲を惜まざりき、尚數年前に牧師セルドンが「御足の跡」てふ小説を著し、基督の精神を以て社會改善の途を遂行すべきを説くや非常の反響を惹起せしが如き、基督教會に於ては指導者其人を得れば進んで勞働者の友となり、社會事業てふ難問題解決に任せんとするの勇氣勃々たるものあるを見る。

基督教會の奮發

二四　古來基督教會は幾多の社會的害惡を排除したりしにあらずや、ロマ帝國時代に於ては一擧して殺人戲即ち猛獸と囚徒との格鬪を廢止し、蓄妾離婚の弊風を抑制し、又墮胎の陋習を禁ぜしにあらずや、近世に於いては歐米諸國に蔓延せし奴隷制度を一掃して人身賣買を杜絶せしにあらずや、基督教會にして一たび手に唾して起たんか社會問題の解決を見んこと決して不可能事にあらざるべし、吾人は必

ず近き將來に於て一大吉報に接するの日あるべきを信ず。

第五章

奉事

奉事の大則

イエス彼等を召て曰けるは異邦人の君と見る者は其民を治また大なる者どもは彼等の上に權を執これ爾曹が知るところ也然ど爾曹の中にては然す可らず爾曹のうち大ならんと欲ふ者は凡の人の僕とならん登人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且おほくの人に代その命を予て贖とならん爲なり。(可一〇の四二至四五)

二五　臣は君に、子は親に、妻は夫に、僕婢は其主に奉事すべき道はいづれの德教に於ても遺憾なき迄に高調せられたり、殊に日清兩國に於ては忠孝を以て百行の本とする程なれば此點に於ては殆んど加ふべき所あるを見ざる也、然れ共君は臣に、親は子に、夫は妻に

主人は僕婢に、長上は幼者に、強者は弱者に對じていかに事ふべきやに至ては杳として聞く所なし、偶之あるも彼も亦人の子なり宜しく一篇同情の心を以て使役すべしと云ふに過ぎざれば優者をして弱者の足を洗はしむるが如きは到底望むべき所にあらざるなり。

基督は萬古に卓絶する所の見識を以て社會組織の弱點を看破し「爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役るゝ者となれ、また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は凡て人の僕となれ」てふ空前の大訓を示し、而して人の子の來るも人を役ふ爲にあらず反て人に役はるゝ爲なりとて或は稅吏罪人の友となり、或は十二弟子の足を濯ひ、或は癩患者の手を採り、終には十字架上に犧牲の死を遂げ、以て實際的教訓を與へられたり、是に於て乎心窃に相門の徒を凌駕せんとの非望を懷きし輩も初めて聖意の難有さに感泣し、患難相助るのみかは、歡樂に於ても相偕にすべきを悟り、基督の死後ペテロ、ヨハネ、ヤコブ等の先輩は後進者たるパルナバ、パウロの言を容れ、頗る謙遜の態度を以て彼等に對せしは吾人が一大美德として深く敬慕する所なり、爾來基督教界に於ては連綿として此美風を繼承し、之を東洋人の尊大倨傲の態度に比すれば個人としても又社會としても大に稱すべきものあるは吾人が夙に認識する所なり。

二六　近時我國に於て公德問題の云爲せらるゝを聞く、蓋し慶幸すべき現象なり、思ふに公德とは人を役ふ場合を意味するにあらず、自ら進んで人に役はるゝ情態を意味するにあらずや、例之ば重き鞄を提ぐる老幼婦女を見れば其勞を分つが如き、車船中にて席を讓るが如き又不知案内の旅客の爲に便利を計るが如き小事より、或は議員となり公吏となり、或は其他の名譽職員となりたる場合に於て私

を忘れて義勇公に奉ずるは是れ公德にあらずして何ぞや。

夫れ公德は人を役ふ爲に非ず人に役る〻爲でゝ基督奉事の大訓に其源を發したるものなれば、苟くも公德の流行を見んと欲せば彼の模範的行動を憧憬すると共に身を殺して仁を爲せし犧牲的精神を渴仰せざるべからず、人苟くも此精神を捕捉するを得ば天下民衆に對する恰も慈母の子に於けるが如くなるを以て、這べば起て、起ては歩めと援助の手を伸ばすに至るべきなり。

上は我廟堂の諸君子より下は町村吏に至るまで其長上に對しては盡すべきの道を知るもの〻如し、然れ共其下僚に對するや尊大倨傲一見嘔吐を催すべき態度に出る者少しとせず、彼等の多くは吾人民衆の公僕たることを辨へざるにや冷然として杓子定規を振り舞し、以て得々たるが如きことなしとせず、實に痛嘆すべきの至にあらずや。

公德の養成所

二七　由來家庭は人々喜んで奉事の實を全うせんとする所也、然れ共我國に於ては妻子弟妹のみ從順の美德を發揮し、己を忘れて長上に奉事すれ共、長上は幼弱者に對する奉事の道を知ざるを以て己に奉ずる頗る厚く、甚しきに至ては己のみ飽食煖衣を貪り、以て幼弱者の怨を買ふとなしとせず、かくの如き家庭よりして公德を重んずる紳士淑女の輩出を望むは是れ猶ほ木に緣りて魚を求るの類ならんのみ、家庭内に於て奉事の道行はれずんば焉ぞ社會公德の流行を望むべけんや、吾人が切に希望する所は家庭にては萬事平等を主とし家族打揃ふて同一の食卓に就き同一のものを飲食し、衣服其他の調度の如きも成るべく均一ならんことなり、かくの如き美風の存する家庭にして初めて公德を社會に漲らすを得べきなり。

今一つ奉事の養成所として見べきものあり、大中小の學校是なり、

吾人が幼時漢學塾に在るや長者の爲に枝を折るてふ一節を振り舞はして、年長者が幼者を驅使するが如き蠻風盛に行はれたり、今や此の如き弊風は杜絶したるならんも世上幾多の學校に於ては上級者は傲然として下級者に臨み、禮節を缺く事少からずと云ふ、近頃帝國大學の一學部に於ては坐席爭ありとか、中學小學の修學旅行中往往幼者を推除けて車船に搭乘する上級者を見受ることあり、教育家たる者宜しく奉事の意眞義を解し先づ校内一般に公德の普及を計るべきなり、校内に於て「おの〳〵己が事のみを顧みず人の事をも顧みよ」(腓二の四)てふ精神教育を施すを得ば此美風は施いて校外に及び終には全社會を風靡するに至るべき也。

公德の本塲

二八　由來基督信者は奉事の眞意を解する者、教會は即ち公德の本塲也と謂ふ者も不可なき也、教會の主任者を會長と稱せずして牧師と云ふが如き聞馴ざる耳には一種異樣の感を與ふべきも深く其深意を味ふ時は世にも尊き美稱たるを知るべきなり、蓋し此稱呼は牧者が群羊を飼養するに際し至らざるなきの愛を以て懇々の誠を致す美風に發したるものなればなり、又牧師を教役者英語にてはミニスタと稱す、こは「人に役る」てふ精神に出でしものにして、教會の主任者は幼弱者、貧者、病者、孤獨者の爲に慈母の愛を以て公僕の務をなすの意なり、會長の榮位にある者にして尙は然りとせば之が補佐の任にある執事長老は勿論全會此心を以て互に相奉事するの美風を馴致し凡て教會に入來るものをして別乾坤に遊ぶの感あらしむべきなり。

以上は基督教會の理想にして實際は之に及ばざる者甚だ多し、是れ吾人が基督に對し社會に對し恐懼措く能はざる所なり、然は云へ平生奉事の大訓を耳にし、且基督犧牲の大精神に養るゝものなれば、

いづれの教會に於ても多少に拘らず理想を實現しつゝあることは吾人が證明せんと欲する所なり。

之を要するに社會公德の養成所とも云ふべき基督教會諸學校及び家庭に於て奉事の精神を涵養せば幾多の紳士淑女踵を接して輩出するに至らん、而して此の如き士君子が今日の己あるを知つて他あるを知らざる儕輩に代りて社會の公僕となり指導者となるに至れば公德の流行は置郵して命を傳ふるより速かならん、思ふて是に至れば吾人の責任も亦大なるかな。

第六章　慈善

愛に一個の教法師あり起て彼を試み曰けるは師よ我なにを爲ば永生を受べきや　イエス曰けるは律法に錄されしは何ぞ爾いかに讀か答て曰けるは爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべしイエス曰けるは爾の答へ然り之を行はゞ生べし彼みづからを即なき者に爲んとてイエスに曰けるは我隣とは誰なるか　イエス答て曰けるはある人エルサレムよりエリコに下るとき强盜に遇り强盜その衣服を剝取て之を打擲き瀕死になして去ぬ斯る時に或祭司この路より下しが之を見過にして行り又レビの人も此に至り進み見て同く過行り或サマリアの人旅して此に來り之を見て憫み近よりて油と酒を其傷に沃これを裹て己が驢馬にのせ旅邸に携往て介抱せり次日いづるとき銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ費もし增ば我かへりの時なんぢ

に倣ふべしと曰り然ば此三人のうち誰か強盜に遇し者の隣なるさ爾慈ふや彼いひけるは其人を矜恤たる者なりイエス曰けるは爾も往て其ごとく爲よ。

（路一〇の二五至三七）

基督の慈善

二九 主基督の猶太原頭に福音を宣傳せらるゝや、温き愛の說敎が滔々として荒野に漲りし耳ならず、主は是れ愛の權化にして聖手の觸る所、聖足の蹈む所、愛の光輝赫灼たるものありき、馬太傳の記者は此間の消息を傳へてかくなん錄したり云く「イエスガリラヤを偏く巡り其會堂にて敎をなし天國の福音を宣傳かつ民の中なる諸々の病もろ〳〵の疾を醫しぬ其聲名あまねくスリヤに播りしかば人々すべての患へる者萬殊の病また痛惱る者あるひは鬼に憑たるもの癲癇瘋癲の病に罹れる者を彼に携來ければ之を醫せり」と、是れ基督が世の可憐者を見て衷情忍ぶべからざる惻隱の心に發せし慈善的行爲にあらずして何ぞや。

慈善事業の勃興

三〇 爾來基督敎界に於ては救主の聖意を奉體し、世の可憐者に對し深厚なる同情を寄來りしも未だ慈善事業としては取立て稱すべきものなかりしは吾人が深く遺憾とする所なり、然れ共斯敎の要點たる愛隣の大訓は長入に埋沒すべきにあらず、歐洲宗敎大革命後に於て漸く萌芽を發せし愛の實行は第十九世紀の曉に於て青々として繁茂し、蘇國のロボルトンが貧民窟の兒童を集て日曜學校を創立し、英國のヂョンハワルドが監獄の改良を企てたるを嚆矢とし、看護界に於るナイチンゲルの美擧、モロカイ嶋に於るダミエンの犧牲的同情、チョーチ、ムーレルの孤兒院事業等頻々として起り、今日となりては全世界至る處慈善事業の勃興を見ざるなく、之が爲に醵出する所の金額は數億を以て數ふるに至れり、一昨年末の調査によれ

我國の慈善事業

ばロンドン市に於て慈善の爲に醵出せし金額は一億五千萬圓以上なりしと云ふ、實に盛なりと謂ふべきなり。

三一　我國に於ても教界の志士仁人が卒先して孤兒院、感化院、慈惠病院等を創設して以來各種の慈善事業續々蹶起し、大に人道に資する所あり、耳ならず、明治の照代に燦爛たる光彩を添しは吾人が感謝措く能はざる所なり、然れ共我國民の慈善心は歐米のそれの如く未だ發達せざるが爲なるか、將た又當事者の人格と其遣口が社會の同情を喚起するに足らざるが爲なるか、いづれの事業も財政上の窮乏を告げ其前途頗る憂慮すべきものありと云ふ、蓋し大に講究すべき問題なり。

慈善の教訓

三二　吾人は本文に掲る所の基督愛隣の比喩を讀み慈善事業に付て一大暗示を得たるの感なくんばあらず、請ふ試に吾人の所感を語らしめよ云く「ある人エルサレムよりエリコに下る時强盜に遇り强盜其衣服を剝取て之を打擲き瀕死にして去ぬ」是れ不慮の災難に遇ひ人の慈惠によらざれば其生命の安全を得る能はざる世にも憐むべき者ならずや、吾人が慈善事業に於て最も注意すべきは眞實慈惠に償する者を救濟するにあり、ロンドンの如き各種の慈善事業が旺盛を極むる土地に於ては妻は教會の慈惠金によりて衣食の資料を得、兒女は教育會の補助費によりて書籍筆紙墨は勿論食費の供給をも得るの途あり、かくして一家はその糊口に差支なきを以て之が養育の責に任すべき戸主は悠々何の爲す所なくして日を過すが如き滑稽も少からずと云ふ、豈に誠しむべきことならずや。

宗教家の冷淡

三三　次に錄して云く「此時ある祭司此路より下りしが之を見過して行り又レビの人も此に至り進み見て同く過行り」と、祭司とレビとは

是當時の宗教家にして平生愛の説法を口にする者なるが、實際人の難を見て冷然看過する夫れ此の如し、思ふに是紺屋の白袴の類乎、慈善家往々親切の行を缺き、教育家往々己を敎へざるの過に陷る、豈に懼るべきことならずや。

眞宗の慈善家

三四　次に「サマリヤ人旅して此に來り之を見て憫み」とあり、三人中一人の慈善家を見は吾人が甚だ快とする所也、前述の如く慈善心の喚發は前古無比と稱すべき二十世紀の今日に於ても眞正の慈善心ある者は十中一あるなし、我國に於ては尙更に少數なるが如し、彼サマリヤ人は「近りて油と酒を其傷に沃て之を裹み」とあり、即ち應急の手當を施し、丁重に繃帶を卷き與し也、こゝは人里遠き野路なれば「己が驢馬にのせ旅館に携往介抱せり」、實に彼は世にも難有慈善家にあらずや、普通の人なりせば應急手當を施したるのみにて止みしなちんに、彼は己が驢馬に抱きのせ旅館に入りし後は其側に侍して終夜看護の勞を取りたり。

手の屆く範圍

三五　凡そ慈善事業は慈善家其人の手の屆く範圍に止べきにあらずや、孤兒院の如きは多して百人少きは五六十人を限りとす、感化院の如きは三四十人を越べからず、多く院役者を使用するが爲に多々益辨ずと云ふ事業家ありと雖、吾人は之に贊同する能はず、慈母の愛は多くして十名少きは一兩人に限らるればこそ遺憾なきまでの保育を爲し得るなれ、十數名の兒輩あるに至れば其不行屆なるが爲に種々の缺陷を生ずるや明かなり。

「次の日出るとき銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ費もし增ば我かへりの時なんぢに償ふべしと曰へり」以上論ずるが如く慈善事業は當事者宜しく手を下して爲すべき者なれ共、萬止むを得ずして他

人に委托するとき、即ち院役者を雇用する時は其事業費の如きは豊に供給するのみならず相當の手當をも給與せざるべからず、何となれば當事者其人に於てはいかなる不自由を忍んでも在院者の爲に最良の途を講ずべきも、院役者となりてはそれまでの犠牲的努力を望む能はざる事情なくんばあらず、世には財政窮乏の爲に院役者に報酬を予ふる能はざる慈善團體あり、いかに慈善事業なればとて事是に至れば寧ろ解散すべきにあらずや。

慈善家の資格

三六　尚是に味ふべきは「償ふべし」の一句ならずや、吾人は自活するだけの資産ある者若くは一二の友人によりて己が生計費の供給を得る者にあらざれば慈善事業を起すの資格なしとの説を持する者也、今一歩を進めて給費不足を告る場合には私産を以て之を償ふほどの資産家ならば尚ほ更に可と曰はんと欲す、是れもとより吾人の理想にして實際資産ある者は慈善心に乏しく、慈善心に富める者多くは貧境にある習なれば、此理想を實現することの難きを知る、然れ共今日の如く慈善事業に衣食するもの多きを加ふるときは其弊や測るべからざるに至らん、今にして之を矯正せずんば天下の人心は慈善事業を厭忌するに至らんも亦知るべからず、基督愛隣の大訓は慈善事業家の金科玉條として日夕大に服膺すべき至言なり、世の慈善に志す者大に學ぶ所なかるべからず。

第七章

使命

また天國は或人の旅行せんとして其僕をよび所有を彼等に預るが如し各人の智慧に從ひて或者には銀五千或者には二千或者には一千を予おき直に旅行せり五千の銀を受し者は往て之を貿易し他に五千を得たり二千を受し者もまた他に二千を得たり然るに一千を受し者は往て地を掘その主の金を藏せり歷久て後その僕等の主かへりて彼等と會計せしに五千の銀を受し者その他に五千の銀を携來りて主よ我に五千の銀を預しが他に五千の銀を儲たりと曰ければ主かれに曰けるはあゝ善かつ忠なる僕そ爾寡なる事に忠なり我なんぢに多もの を督らせん爾の主人の歡樂に入よ二千の銀を受けし者きたりて主よ我に二千の銀を預しが他に二千の銀を儲たりと曰ければ主かれに曰けるはあゝ善かつ忠なる僕そなんぢ寡なる事に忠なり我なんぢに多もの を督らせん爾の主人の歡樂に入よまた一千の銀を受し者きたりて曰けるは主よ爾は嚴人にて播ざる處より穫ちさゝる處より斂る事を我は知故に我懼てゆき主の一千の銀を地に藏し置り今なんぢ爾の物を得たりその主こたへて曰けるは惡かつ惰れる僕そ爾わが播ざる處より穫り散ざる處より斂ることを知か然らば我が金を兌換鋪に預置べきなり然ば我が歸たるとき本と利とを受べし是故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に予よそれ有る者は予られて尙あまりあり無有者はその有る物をも奪るゝ也無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒する事有んぬ。（太二五の一四至三〇）

使命の眞意義

三七　吾人々格を磨き、俯仰天地に恥るなき心事を以て世に立は是人生第一の目的なるとは前に述べたるが如し、然れ共是は眞理の一面なれば之のみにては未だ充分なりとは云ふべからず、即ち其磨き得たる人格を以て世の爲人の爲に大に竭す所なかるべからず、是れ之を人の使命と云ふ。

世にはいかなる使命を有して此世に生存するやを知らずして蠢爾として一生を終るもの多し、偶〻使命を自覺するも蹉跌に次ぐに蹉跌を以てし生涯何をも成し得ず空しく大志を齎らして去る者も少からず、吾人が切に希望する所は苟も世に生れたる者は大小輕重の別てなく、必ずや自家使命の存ずべきを知り、之を發見すべく留意せんとなり、孔夫子の所謂十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はずとは人格修養を意味し、五十にして天命を知るとは使命の確立を云ふにあらずや、尋常の人に在ては其職業の撰定すら容易の事にあらず、之が爲に煩悶苦慮病を釀す者なきにあらず、況んや人生の使命に於てをや。然らば則ち使命とは何を意味するや、是れ吾人が知らんと欲する所なり、ダビデの詩に曰く「世の人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや、人の子はいかなるものなれば之を顧みたまふや、（中略）またこれに手のわざを治めしめ萬物をその足下におきたまへり」（詩八の五六）と、これ使命の謂ひにして、天意の存する所に隨ひ天功を亮るに外ならず、果して然らば古來聖賢敎を立て鞠躬努力せられたるは萬物の靈長たる人をして天性の美を發揮せしめんが爲なれば其使命や實に大なりと謂ふべきなり、又世々の政事家中眞に民の休戚を己が双肩に荷ひ粉骨碎身竭す所あるは是れ亦た人をして向上せしめん爲なれば使命にあらずして何ぞや、其他何事にても世道人心を補益し造化の妙工を助成する如きものは使命と稱すべきなり。

三八　世人往々使命と職業とを混同するを見る、是れ謂れなきにあらず、

前述の如き宗敎、敎育、政事、文學、工藝等高等の職業に於ては職業即ち使命の場合少からず、否農園に土を掘り、花園に花を摘む、田

夫野人にしても其心懸一つにては其職業によりて使命を全うする事なしとせず、然らば職業は多くは口を糊せん爲の作業にして使命は糊口以上に高貴の目的を有して努力するの謂なり。

本文の比喩にもある如く五千の銀を得たるものあり、二千の銀を得たるものあり、更に下つて二千の銀を得たるものあり、人生其天稟はゞ不平等なるはなし、智愚賢不肖は天の定むる所にして吾人の責任にあらざれば愚者は其愚を守り、不肖者は不肖者相應の事を成す是れ天命ならずや、若し夫れ二千の銀を受し人に五千の儲を迫まらば是れ不公平の甚しきものにして天を怨むる亦止むを得ざるなり、然れ共看よ、主人は五千の銀を受し者が五千の銀を得たるを賞せし如く、二千の銀を受し者が二千の銀を得たるに對して同一の褒詞を與へしにあらずや、只茲に注意すべきは二千の銀を受し僕が其の銀

を布に包み地に藏し置きし一事なりとす、事の成否は吾人が豫め期すべき所にあらざれば只人事の限りを盡さいるべからず、折角此世に生れながら何の爲す事なくして悠々として醉生夢死するは皇天の深く咎むる所たらずんばあらず、「無益なる僕を外の幽暗に逐やれ其處にて哀哭切齒すること有ん」との眞意深く思ふべき也。

三九　余が同志社在學中米人ポルチルとなん呼る傳道師來りて說教せし事ありしが、今尙余が記臆に存する一節あり曰く「ポルチル夫人一日某貴婦人を訪問したりしとき、某は種々珍奇の盆栽を示し、徐ろに問て曰く貴女は何の盆栽を愛賞せらるゝやと、夫人は一の盆栽だに有せざりしかば答ふべき所を知らず、只卒直に我に四人の男兒あり、朝夕之が栽培に勤むるのみと、實に夫人は四兒の敎育に全力を注ぎ、眺れも天下有用の材となれりしと云ふ、蓋し母としての使

命を全うせしものなり。

一看護婦あり其所信を述て曰く妾が九歲の時母大患に罹りしが、北米西部片田舍の事とて招くべき醫士なく、責ては看護婦にてもと幼な心に思ひしも、それさへ得られず、終に母は不歸の客となりたまひしかば、其時よりして看護に志し、多年螢雪の苦を積み茲に卒業するを得たれば、イデ是れよりして一人にても世の惱める者、病める者を助るを得ば妾が望足ると、此人の如きは眞に其使命を自覺するものと謂ふべき也。

吾人動もすれば重大なる使命を夢想す、何ぞ知らん、眞個の使命は日々の作業に伴ふものなるを、記せよ市井漁區の間にも農園田歩の間にも發見すべき使命あり、殊に婦人の使命は近く家庭の中に存するを、基督が二厘の賽錢を投せし寡婦を賞し、左右大臣の榮位を懇請せしゼベダイの二子を叱斥されし實例は吾人が深く服膺すべき教訓にあらずや。

余が幼時英學研究の爲鄕關を辭して藩校に至るや途上胸間を往來したる一念は何の爲に英學をなすやにありき、居三年學漸く熟するに至り英學は方便にして他に大目的の存するを自覺し暗に其大目的を發見すべく或は自問し或は友人と謀り大に研究する所ありしも容易に確定する能はざりき、蓋し余が見聞の開擴と共に人格も幾分の向上をなすを以て昨日是なりとせし所は今日の非となりたればなり、然れ共一朝斯教の眞諦を悟り、人生問題の何たるを知るに至り、余が人格を磨く上に於て將た又世道人心を補益する上に於て教役者又は教育者となるは是れ最良法たるを發見し茲に使命の確定を告るに至りしなり。

第八章

應急

其さき天國は燈を執て新郎を迎に出る十人の童女に比ぶべしその中の五人は智く五人は愚なり愚なる者は其燈を点るところに油を携へざりしが智き者は其燈と器に油を携へたり新郎おそかりければ皆倦怠して眠れり夜半ばに叫びて新郎きたりぬ出て迎へよと呼聲ありければこの童女ども皆おきて其燈を整へたるに愚なるもの智き者に曰けるは我儕の燈滅んとす願くは爾曹の油を我儕に分ち給へ智きもの答て曰けるは我儕と爾曹とに恐くは足まじ爾曹賣者に往て己が爲に買られ買んとて往しさき新郎きたりければ既に備たる者は之と偕に婚筵に入しかば門は閉られたり斯て後その餘の童女きたりて曰けるは主よ主よ我儕の爲に開たまへ答て我まことに爾曹に告ん我は爾曹を知らずと曰り然ば愈らずして守れ爾曹その日その時を知ざれば也。（太二五の一至一三）

四時春景色を望むは人の常情なり、然れ共天や吾人の希望を容れず、春の後には鑠金の炎熱あり、三月の花よりも紅なる紅葉を賞せしかと思へばはや寒風凜烈肌を裂くの冬を迎へざるべからず、萬里の碧天は瞬く間に霹靂一聲耳を劈くばかりの激變なきにあらず、人生も亦此の如し、豫め備る所なかるべからず。

四〇 聞所に依れば古の武士は常に變に備るの途を講じたりと、思ふに彼が常住坐臥腰の刀を離たず、偶〻路を行やいつも左側に就しは敵の襲撃に對し太刀を拔くに便せんが爲にあらずや、又路傍辨當を遣ふに大樹又は巨岩を背にせしは背後よりの敵に備ふる意ならずや、其他城廓陣營は勿論普通の住家と雖變に備ふる極めて周到なるものあり。

四一 本文の比喩を見に其要點は末節の怠らずして守れ爾曹其日其

武士の注意

警念の道

時を知らざれば也」と云にあるが如し、蓋し吾人が世にあるや戰國時代の如く敵の襲撃に遭逢するが如き椿事は殆んど絶無なるべきも、天災、地變、疾病、奇禍なしとせず、是事變にあらずして何ぞや、苟くも事變を豫期す之が備をなすは當然の事にして智者を待つて知るべきにあらざるなり、應急に尋常と特別の二種あり、尋常の應急は十人の童女均しく提燈を用意したるが如く堅牢なる家屋を設備して暴風洪水、火災、盜賊の難を防ぎ、又平生體軀を強健にして時疫其他の疾病を避け、又身に藝術、職業を習熟して世態の變遷に處する等何人も常に用意する場合を意味す。

かくの如く吾人が豫防し得べき變災と雖、事急激に發するか又は頻類として至るときは周章狼狽其措置を誤り大失敗を取ることなしとせず、是れ特別の應急道を要する所以なり、特別の應急とは果して何を意味するか、腰に太刀を横へ路の左側を歩し、樹石を小楯に取ることを覺えたればとて武士とは稱すべからず、白刃前に迫り鼎鑊後に從ふも神色自若として變に應ずべき膽力を有する者にして初めて武を以て許すべきにあらずや、禪僧の如きも禪榻に坐し高風に嘯くも未だ禪味を得たりと云ふべからず、命旦夕に迫るも憂へず悠々自適する者にして初めて禪學の妙を得たりと謂ふべきなり、是之を應急道と云ふは非乎、吾人が天父に信頼する所以の眞意も亦是にあり、看よや使徒パウロは信仰の妙境に到達したるの人、其言ふ所生死の境を超脱したるものにあらずや、曰く「キリストの愛より我儕を絶せんものは誰ぞや患難なるか困苦か迫害か飢餓か裸程か危險か刀劍なるかこれわれら終日なんぢのために死に付され屠られんとする羊の如くせらるゝなりとあるが如し然ぞも我儕を愛むものに頼すべ

人生行路難

て此等の事に勝得て餘あり、羅八の三五至三八)と、神の愛に頼れる信念の向ふ所天下懼るべきものを見ず、實に壯なりと謂つべきなり、吾人幸に此信境に到達せば人生の慘事一も憂とすべきものなきに至らん、勤めずんばあるべからず。

四二　尙此外人生の行路を阻害する者尠しとせず、時としては思はざるの寃罪を蒙り、又時としては甚しく曲解せられ、人間に向つて是非を爭ふべからざる非運に際會することあり、事此に至れば我心事を照覽したまふ天父を仰き、聖慮に一任するの外なけん、十九世紀の大說敎者ベンリー、ワード、ビーチャーが大寃罪に苦しめられしときも、悠然として天を仰き「余がかくの如き不潔なる罪惡を犯さゞることを知るものは夫れ天父と我慈母なる哉」と獨語せしとき、彼を擁して、詰問の矢を發しつゝありし三百の牧師等彼の面貌に輝ける靈光に打たれ、然りかゝる叫を發し得る高潔なる偉人焉んぞ不潔の罪に染むことあらんやとの感に充たされたりと云ふ、蓋し天意に一任することのいかに安く、且つ衷に顧みて良心の褒詞を聞くことのいかに樂しきかを知る者は天下皆我を非なりとするも更に懼るべき所を知らず、吾人も此に到れば百萬の守備兵あるよりも勝りて安固なるを覺ゆるなり。

宗敎家の連離

四三　吾人宗敎家は動もすれば宗敵なるものゝ爲めに甚しき窘迫を受ることあり、是れ東西宗敎歷史の均しく證する所なり、二十世紀の今日殊に我國に於ては國民が宗敎に對する襟度は頗る寬大なるが上に憲法三十八條に信敎の自由を保證するあれば宗敎上の鬪爭又は大迫害抔は起るべくも非ず、然れ共時に頑冥不靈の徒ありて異宗派に向つて窘迫を試むることなしとせざれば此邊の心得も亦必要なりと

す、基督は「我爾曹に告ん爾曹の敵を愛み爾曹を詛ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虚過迫害もの〻爲に祈禱せよ」(太五の四四)と敎へ、孔夫子は「怨に報ゆるに德を以せよ」と示し、先聖後聖其說く所符節を合するが如く一なるものあり、吾人此心を以て反對者に向ふ、彼の心を融和せずんば止ざらんとす、互に相爭ふて共に眞理の光を沒するに比すれば其逕庭實壤も啻ならざる也、若し夫れ吾人の間に異說を唱ふる者あらんか「禁ること勿れ我儕に敵抗ざる者は我に屬者なり」(路九の五〇)て ふ聖旨に從ひ天空海濶の量を以て之に對すべし、蓋し異端を攻るは是害のみと知るべき也、ガマリエル曰はずや「此人々を容て之に係はる勿れ若その謀るところ行ふところ人より出ば必ず亡ぶべし若神より出ば爾曹彼らを亡すこと能ず恐くは爾曹神に逆ふ者とならん」(徒五の三八、三九)と、吾人宜しく此故智に倣ひ寛容以て之に接し其自由行動に任ずべきなり。

要するに吾人の特別なる應急法は外にあらずして內にあり、形式にあらずして精神にあり、衷情神の大自在力を仰ぎ且つ基督によつて顯されたる天父無邊際の愛に信賴し、大に修養鍛錬して止まずんば終には千曳の石は轉すとも我心は轉すべからずてふ大確信に到達すべし、此信境に加ふるに鋼鐵の如き體軀と金石の如き意志を以てし更に周到なる用意を以てせばいかなる事變に遭遇するも庶幾くは其措置を誤ることなからんか。

第九章

跋

夫れ基督の處世訓は財産、勞働、奉事、使命、慈善、應急の活問題に渉り人生に關する事項は悉く網羅するに拘らず、獨り國家問題に對してのみ敎ゆる所なきは甚だ怪しむべきに似たりと雖、深く考ふるときは其當さに然るべき理由なくんばあらず、試に思へ、廣く自然界の現象を探究する科學者として又深く宇宙の眞理を研鑽する哲學者として又は其眼中國家なるものありや、彼等は科學者哲學者の見地よりするときは則ち國家を超越するものなり、然れ共國家の一員として存する者なれば其收得たる學識を以て國家に貢獻するが如く宗敎家が道德心靈の二界に渉り神人に關する大眞理を宣傳するに當てや國家を

超越するもの、其眼中豈に區々たる國家的觀念あらんや、基督は猶太國民がいかにして其獨立權を回復せんと焦心苦慮する間に立つて平然として萬國民にかゝはれる福音を宣傳し、偶双關法を以て彼を國家問題の渦中に引き込まんとする者あれば(カイザルのものはカイザルに納め神のものは神に納めよ)(路二〇の二五)として政敎自ら別あり決して混同すべからざる大義を明にし、敢て時事問題に容喙せざりしは偶其神の如き大智を洩すものにあらずや、斯敎の大主眼は眞人物を造るにあるは勿論人生凡百の問題に就て訓練を與ふるにあり、かくの如くして銀へ上げられたる人格は各其父母の國に對して應分の義務を竭さずんばあらず、是に於て乎宗敎と國家と密接なる關係生ずるなり、看よ直接仁義五常を說かずして之が本源たる愛を說き而して五常の實行に於ては遙に孔孟を凌駕すべき基督信徒を造りし

基督は國家問題を喋々せずして之が要素たるべき人若くは家を造り、專ら治國平天下の大道を誇張したりし東洋諸國に範を垂るべき國家を興すに至らしめしは妙ならずや。

又トルストイの一派は基督の「惡に敵する勿れ」てふ一句を小楯に取りて不抵抗主義を主張し、施いて非戰主義を高調す、其精神は洵に善し、然れ共是れ果して聖語の意なるか大に講究せざるべからず、思ふに山上の垂訓は人格の修養に志篤き門弟子の爲に說かれたものにして相門の間に於ては假令一朝の怒に乘じて撲擊を試るものあるも靜を失はず、所謂負て勝つの秘密を授けしにあらずや、然るを社會一般の人のみならず、之を國家と國家の間に應用せんとするは附會も亦甚しと謂ふべきなり、かく論ずればとて吾人は戰爭を是とするものにあらず、一日も速に世界の全面より海陸軍備の撤去せられ戰爭の全く杜絶せんことを希望するものなり、蓋し基督愛隣の大訓は先づ人と人との間を和らげ、次で家と家との交際を密にし、更に進んで國と國との關係を深うし、終に干戈を動すの餘地なきに至らしむべきを信ず、現に英米の如く兄弟も啻ならざる親密の間柄に於ては偶〻兩者の主腦部に於て衝突を來たすことあるも容易に國民の贊同を得る能はず、終に刀に訴ぬらずして止んことは吾人が信せんと欲する所なり。

其他婦風、禁酒、禁煙、禁亞片問題の如きも基督は一として直接なる敎訓を殘さゞれ共、其啓發指導によりて人らしき人となり、且つ聖足の跡を歩せんとする吾人は苟くも天意人道に背反するものは其個人たると團體たるとを問はず、又其人たると物たるとを問はず害の小なる者は之を改善し、害の大なるものに對しては根本的排斥を企つる

は當然の事にあらずや、實に基督勸善の大精神は世界を蕭清せずんば止まざるなり、吾人は歐米の基督教徒が如上の諸問題に熱衷して奮闘するを瞥見し、其衝天の意氣を壯とする者なれ共、かゝる意氣を有するものは極めて少數にして惡の流行に對比するときは鼠を以て猫を謀るの感なくんばあらず、吾人が切に禱る所は球上幾億の基督信徒が天來の靈氣に打たれ、一齊に蹶起して惡に抵抗せんことなり、我國の教徒は其意氣に於て其精神に於て決して歐米の夫に下るものにあらざれ共其數に於て可ならざるものあり、然れ共信念の動く所天祐盛に加はる、吾人は成敗を天に歸し只進んで竭すべきを竭さんのみ、同勞同主義の士以て奈何となす。

記せよ天國は芥種の如きものなるを、現時世界に雄飛する所の救世軍も、百萬の青年を聯結する所の青年會も三四十年前に溯れば蕞爾たる小團體に過ぎざりしなり、吾人は信ず往時凡百の制度文物は一度佛國を經ざれば全歐に普及せざりし如く凡人事に關する千百の問題は基督信徒の手に籍らざれば實現せられざるもの多きを、蓋し人事問題は其解決を人格に俟つものなればいかなる名案卓說も人格を外にしては只空論として存せんのみ、基督は百年江河の澄るを待つの愚をなさずして人格修養を以て斯教の本源とせられたるは其旨深く且つ遠しと謂ふべし、吾人豈に感謝せずして可ならんや。

明治四十一年三月[illegible]日印刷
明治四十一年三月十日發行

基督の處世訓
定價金十錢

著者　宮川經輝
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

發行者　福永文之助
神戸市元町一丁目二十四番屋敷

印刷者　菅間德次郎
神戸市元町一丁目二十四番屋敷

印刷所　福音印刷合資會社神戸支店

發行所　警醒社書店
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
振替貯金口座五五三番

復製不許

紐育ユニオン神學校ホール博士著
同志社神學校教授日野眞澄著

○實驗的基督教

定價 六十錢 郵税 八

是れ北米宗教界の泰斗、紐育市ユニオン神學校長ホール博士が四年前バロース講座の擔任者として講演せられたる者なり。博士が宗教上の意見の穩健にして其智識の該博なる殊に東洋の宗教に對して洞察力の深厚なるは茲に贊するを須ゐず。本書は實に博士の特長を遺憾なく發揮せる者なり。其説くところは毫も基督教の枝葉に拘泥せず、主として現今思想界の立場よりイエスキリストの根本的宗教思想の解釋を試みたる者なれば苟くも意を宗教上の大問題に注ぐものゝ必ず一讀せざるべからざる近代の名著なり。

同博士が日本に於ける講演の通譯者たりし日野教授に請ひ之れを邦語に飜譯して爰に本書を發行するに至れり。行文流暢にして能く原著の意を得たりや否やは敢て讀者諸君の明斷に委ぬと爾云。

原田助譯述

○耶蘇之時代

定價 上製並製 八十錢 郵税 各 六十錢 八十五錢

附錄 日野眞澄編

猶太の地理、氣候及暦一班耶蘇の性格を究めんとする者は須らく新約全書の記事の外別に其時代に溯りて特に世界の形勢制度文物思想を參照するの要あり蓋し二千年の星霜は人類の狀態を一變して想像以外の懸隔を生せしめたればなり本書は獨逸の碩學サイデル博士の原書に基き補譯されたるものにして所謂隔靴搔痒の感を除きて單に新約聖書研究者に必要なる智識を增進するのみならず津々たる興味を以て之れに親炙するの裨益を供せり斯道に志あるもの一讀せざるべからざる良書なり

宮崎八百吉譯

○アウガスチン懺悔錄

定價 七十錢 郵税 八錢

肉慾の甘樂、罪惡の苦悶、人生の哀別離苦、花林孤影の大泣哭、清亮なる生活嗚呼是れ血あり肉あり良心ある代表的偉人の懺悔錄なり、明確不磨の聖徒的獨身寫眞鏡なるを知れ、而して後在り玲瓏徹底の默會を讀んで在り、信者不信者之で其の自個見神

宮崎八百吉著

○基督教大系

定價 六十錢 郵税 六錢

本書は著者が希臘文聖書研究と天國的地獄的經驗の賜なり其如何に破天荒にして而も醇粹なる使徒的正統的なるかを見よ其の三位一體、父、子、聖靈の新なる關係惡魔の誘惑聖靈の權威墮獄の恐怖の經驗的記述を見よ、宗教的天才として白人偉なる黃人偉なる乎、之を讀んで之を判せよ。

エール大學教授スチーヴンス博士著
關西學院教授松本益吉譯

○耶蘇の教

定價五十錢
郵税六錢

大阪朝日曰く　本書は基督教研究者の爲に最も明瞭にして正確なる觀念を與ふる好著ならん

開拓者曰く　著者の教授を受けたる松本氏耶蘇の教を譯して世に公にせらる原著餘り專門的ならず譯文も亦明瞭なれば耶蘇の教の原形如何を研究せられんとするもの一讀を要す

東京毎日曰く　耶蘇研究者の爲には無上の好指針なるべし

神學博士湯淺吉郎述

○舊約聖書　箴言講義

定價上製六十五錢
並製五十錢
郵税八錢

希伯來文學の精華たる舊約聖書中の人生問題解釋を旨とし宗教的倫理を鼓舞して異彩を放てる者實に箴言の特色なりとす而して本書は單に其註釋たるのみならず各教訓を分類して講究の便を供せる所從來其比を見ず世の知者の言を學ばんとするものに大知の聰明を得悟したるに於て大に裨益する所なくんばあらず

海老名彈正序
渡瀨常吉著

國體と基督教

定價廿五錢
郵税四錢

本書は最近◎加藤博士の所論を駁す◎我國の思想界に一波瀾を起せる加藤老博士の吾國體と基督教と駁論したるもの基督教と科學及國體の關係且つ彼我論爭の如何にて凡そ一讀せざるべからざるものは是非近來の良書なり

久米邦武講述

日本古代史と神道との關係

定價郵税共
金五十錢

本邦史界の泰斗久米邦武先生其鋭利なる史眼と該博の學識とを以て議論紛々たる神道の起源を考證精論して佛教儒教陰陽道より基督教に及び迷霧濛々たる古代の歷史を推究して我國の政治貿易風俗人種文學を論じ神話を解釋し古書を批判し引例擧證章を分つ事十項を分つ事一百其議論の餘沫飛んで武士道の起原紀元節確定の一大新説に及べる近來の良書なり

牧師　星野光多編

再版　基督教談叢

一名日毎の教へ

定價七十五錢

本書は宗教的美談佳話を以て、斯教の眞理を説明せんと試みたる者也。一年三百六十五日、日毎に貴重なる聖書本文を説明證定するに、一一適切恰當なる事實談を以てせるが故に、家庭禮拜に用ゆるに適せり。本書中に掲載せる談話無慮五百項は、説教者、演説者、日曜學校教師諸君に有益有力の材料を供呈すべし。卷末に掲げたる入念の索引二種は、人の好みに任せ、望みに應じて、本書材料を採出せしむるの妙用あり。

再版　基督教思林

一名日毎學び

定價七十五錢

思想家一覽表（三十餘ページを附す）

星野君の述作は凡て實用的なり。曩に公にせる談叢が、歴史的事實を以て、斯教の眞理を説明せんと企圖せるが如く、本書は、泰西思想家の深思博想を以て、斯道の眞理を闡明せんことを豫期したり。日毎に聖書の本文一二節を題詞となし、中に含まれたる宗教的眞理を各思想家の言説思想を以て例證説明せる所、「談叢」に美談佳話を以てその本文を説明せるに體裁相同じとす、卷末に附錄したる二種の索引は、人をして自在に書中の良思聖想を摘出應用する便利あらしむべく、その思想家一覽表は、百七十餘家の一生に關する要點を知らしめ、以て之が應用に當りその思想の價値を加へしむべし。如上の理由により本書は、説教者、演説者、日曜學校教師諸君を始め、苟くも朝夕脩道の志篤からん人士のため、坐右に缺くべからざる良友なり。

宮川經輝著

基督の靈訓

定價十錢　郵税二錢

基督の聖訓（基督の靈訓と基督の人訓合本）

定價五十錢　郵税無料

新約聖書約翰傳釋義

定價一圓　小包八錢

活る基督

定價二十五錢　小包四錢

靈界の妙趣

定價四十五錢　小包六錢

金言集

定價十錢　小包二錢

原田助 序　**對觀**　大宮季貞編纂

四福音書

定價並製　六十錢　上製　七十五錢

郵税各八錢　菊判裁五百二十頁

原田助先生の序文に曰く、「基督教の中心はイエス、キリストの生涯と其教訓に存す……之を學ぶの途は新約書中福音書と組する四個の基督傳に據らざるべからず……然るに福音書を讀む者の先づ奇異に感ずるは是等の著述が同じくキリストの傳記なるに係らず、配列の順序區々として時日の齟齬あるのみならず、同一の事件を記するに當りても往々相違せるを見ること是なり、……要するに四福音は之を相對照補充して始めて基督傳の全豹を窺ふを得べきなり、即ち對觀福音書の最も必要なるを見るべし、スチヴンス、バルトン兩教授は共に新約書專門の學者にして、其共著に係る對觀福音書は此類の著述中最も新く且精確なるものなり、所謂福音書「調和」中の上乘なるものとす、殊に予の喜ぶ所は著者が強いて齟齬撞着の箇所を調和せんとするが如き姑息法を採らずして、公平に誠實に研究の結果に依て、四福音書の記事を對照配列し讀者の研究に供せられたるの體度にありとす、此好著が大宮季貞君の手を經て邦語に現はるゝに至りしは、聖書研究上永く感謝せられたる一大缺陷を補へるものと云ふべし云々」と敢て江湖の讀者に推薦す、……

……聖醒社書店……

258
439

警醒社書店

特18
44

基督の処世訓

国立国会図書館

020574-000-4

特18-44

基督の処世訓

宮川　経輝／著

M41

ABI-0388